

2000年新春雑感

こ とう まさ ひろ
後 藤 政 浩

コンピューター誤作動問題に大いに揺れた西暦2000年も無事迎える事が出来た。時間がたつにつれ、システム点検や新型のコンピューターの入れ替え等に莫大な経費を要したとのことだが、何かシステム業界の陰謀ではなかったかと思われても不思議ではない気もしてくる。

コンピューターは、誤作動を起こせばこの上ないやっかいな代物ではあるが、今では農村社会も農業機械と同じように、簿記記帳の計数管理から販売に必要な情報発信等、経営になくてはならない道具になりつつある。

さて、我が家のコンピューターは大丈夫かなと、立ち上げ動かしてみたがどうもおかしい。1月に発送する顧客リストが出てこない。2000年誤作動問題がもろに出たのかと思いきや大いに焦った。持ち合わせの知識をフルに出し切り、キーボードとしばしにらめっこしたが埒が開かない。そこで、御用始めの4日、町役場の情報センターパソコン教室に出向いた。ここには専従の職員がおり、私達には強い味方である。そこには同じような問題を抱えた者同士が4人ほどいた。簿記入力準備に入ろうとしたらなかなか思うように動かなかったそうだ。「俺のは2000年問題以前の話だな」と苦笑いをしながら、いろいろ話している内に、そこの一人がぽつりと言った。「農はだて（農作業の開始日）も変わったな一、昔は縄や俵を編んで一年の農作業が始まったもんだが、今はパソコンを動かす事から農作業がスタートする時代だな一」と。

私も、記憶が定かでないが、地域の古老の

話では11日が「農はだて」で、その日は各家庭で早朝から藁を打ち縄を綯う準備をしたそうだ。今日のような丈夫なロープもなかった時代だったので、縄を綯ってからその縄を3本寄り合わせ、馬車に荷物を積み込んだとき使用する強い縄にした。また、井戸水を汲み上げるバケツをつるす縄も同じように編んだそうだ。各家庭で使う一年分の長さを目安に作業が進められたようで、今のような気の利いた暖房器具もない時代、寒い作業場で、正月の供え餅をほおばりながらもくもくと働いた。当時は、藁は非常に貴重なもので、この日のために収穫後の乾燥や保管に気を配り、どこの農家の庭先にも「藁にお」があったものだ。手間取りも、短い休みが開けてこの日から奉公先の農家に戻り、俵編みで一年の農作業が始まった。

藁からパソコンに変わったように、正月を迎える行事や農村生活環境も激変した。

以前は、共通の“音”で隣の作業進行が分かり合えた。たとえば藁を打つ音、脱穀作業の音。農作業の大半は作業場での仕事だったので、仕事の“音”で農にいそしむ連帯感があつたような気がしてならない。

パソコンのキーボードをたたいても隣に聞こえることはない。

近年、通信手段の変化は顕著であり、電子メール等を駆使し画像を取り込み送信すれば互いに栽培状況がわかり、情報や技術を高める事が可能である。また、インターネットでホームページを開設する事によって、より多くの消費者に近づく事も出来る。

2000年——、それは正に農業者自身の転換期ではないかと感じた。

(宮城県南方町・農業)